

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(5)——

豊田 一秀

同じように「公立校」という言葉で表してみても、日本とイギリスでは当然ながらその制度、内容は大きく異なる。多くの本が(注1)イギリスの学校制度について専門的に紹介しているので、ここでは詳しく述べないが、雑駁に述べれば、イギリスの方が校長及び地域の権限が大きく、学校の独自性を発揮しやすい構造になっていると言えよう。

しかし、そうは言っても中央からの監督がないという

訳ではない。一例として、各校は四年に一回の割合で視学官による学校調査(SCHOOL INSPECTION)を受ける。この結果によっては極端な場合、学校を閉鎖することを諮問される場合もあり、学校当局にとっては緊張する調査である。今回は、ちょうどこの調査が息子たちの学校で行われたので、調査の様子と結果を一父兄の立場からお伝えしたい。

もう一つは、学校主催のファッションショウの報告で

ある。これは生徒が即席のモデルになって学校の講堂で行われたショーで、生徒も楽しみにしていたようである。目的は例によって、学校への財政的援助であるが、当日は、何と先生方もモデルとなって登場し、ショーを盛り上げていた。この行事は、学校の持つ独自性の一例として見ても興味深いものと私には思われた。

学校調査とファッションショー、硬軟二題としてお伝えしたい。

毎月、学校から発行される「校長便り」の十二月号に、一月にスクールインスペクションと言われる学校調査があることが書かれてあった。それによるとこの調査は、教育水準局（OFFICE FOR STANDARDS IN EDUCATION）が行うもので、複数（息子の学校の場合は十名以上）の調査官によって一週間にわたり続くそうである。調査の内容は、授業計画、授業の内容、教師の教授法及び技術、生徒の学習態度、生徒の学習到達水準、学校運営、生徒、教師、保護者、理事会へのイン



▲生徒がモデルになったのファッションショー

タビュール等、多岐に渡る。そして、その調査の結果は書面で開示される。そこで指摘された問題点に対して、学校理事会は四十日以内に改善策を具体的に書面で示さなければならぬ。

手紙はさらに、調査に先だって、ある夕に全校の保護者と視学官との懇談会があるので参加して欲しいと書かれていた。後日、この懇談会の議題と保護者へのアンケートが各家庭に送られてきた。議題の下には出欠の確認書が付いている。多くの保護者がこの懇談会に出席すること、それ自体が学校に対する親の「関心」と「協力」を視学官に示すことになるという訳である。学校がこの調査に対してかなり神経質になっていることが感じられる手紙であった。

アンケートの内容を見てみよう。質問は全部で十七の項目からなり、これらに丸を付けて答えて行く形式である。答えは「賛成」「不賛成」の項が、それぞれ更に「強く」「穏やかに」の二つに分れ、計四種類の中から選べる。

*

- 1 私は学校の教える価値と態度に対し満足している。
- 2 学校は良い行動の水準を維持している。
- 3 学校は生徒の登校を保障すべく良く機能している。
- 4 学校は保護者が学校の活動に積極的に参加できるように励ましている。
- 5 私は自分が学校に暖かく受け入れられているように感じている。
- 6 私は各教科の教師と連絡を取っている。
- 7 学校は特別に配慮を必要とする (SPECIAL NEEDS) 生徒に対し充分に応えている。
(あなたの) 一番上の子どもに対し
- 8 私は子どもの学習の水準に対し満足している。
- 9 私は子どもの行っている学習について良く知らされている。
- 10 私の子どもは適切な援助と指導を学校から受けている。
- 11 私は子どもの与えられる宿題に関して満足している。
- 12 私の子どもは学校で幸せである。

(あなたの) 一番下の子どもに対して、質問13〜17
質問内容は8〜12と同じ。

*

当日、夜七時半から講堂で行われた懇談会に参加してみた。因みにイギリスでは、働いている保護者を配慮してであろうか、親を呼んでの会合は夜に行われることが多い。

四百人近い出席であったらどうか、講堂は満席である(生徒数は全校で一四一二人である)。この調査の目的、方法など十二程の議題に添って、視学官である博士号を持った女性が議事を進めて行く。決して威圧的な感じはなく、スマートな会合であった。各議題の後に質問を受け付ける。こんな時、場合によっては学校に対する普段からの不平、不満を保護者が視学官に直訴するという雰囲気になる可能性もあると思うのだが、各項目に対する保護者からの質問も、その数、内容、共に自然で、場に即した建設的なものばかりであり、イギリス人の議事の進め方の巧みさに内心感心させられた。

さて、一週間に渡った調査の実態については、私は実際に学校でそれを見た訳ではないので、紹介できないが、子どもの話によると、大方の学校の様子は普段と少しも変わらなかったようだ。ただ、先生たちがいつもよりは少しやさしいような感じだったと話すのには笑わされてしまった。先生もつらいところである。

数週間後に、視学官からの調査の結果の要約が学校より各家庭に届けられた。大方は肯定的な記述が多く、「こういう書き出しの報告書は今までに見たことがない」と校長先生はご機嫌であった。少し長くなるが、この報告から逆に視学官が何をしようとしていたのかが分かるので、大要を述べてみよう(本物の報告書は四十ページにも渡るものである)。

*

ハワードオブエッフィンガムスクールは良い学校である。キイステージ三(注2)の生徒の四分の三、及びキイステージ四(注3)とシックスフォーム(注4)生徒

の内八十パーセントが全国の期待値を上回る達成を見せている。大多数の生徒は期待値以内に達し、三分の一の生徒は高い到達を示している。A レベル（注5）、AS レベル（注6）、及びGCSE（注7）において全国、及び州（COUNTY）の平均を大きく上回っている。この学校はGCSEの結果においてサリー州におけるトップグループである。大多数の生徒は昨年の職業テストにおいて合格している。全国一般職業資格の結果は素晴らしい。

全ての生徒は、良くバランスのとれた広い範囲のカリキュラムを受け、特別教科、特に音楽、ドラマ、制作、体育において良い機会を与えられている。生徒の学びの質は、全ての段階において九十パーセント以上が良好かそれ以上である。

教師の専門的知識とクラスの良い関係は教育全般に大きく寄与している。キイステージ三、四の八十パーセント以上、シックスフォームの九十パーセント以上の授業は良好、またはそれ以上である。いくつかの授業におい

て、これに当てはまらない場合が見られたが、それは、しばしば、生徒を授業に向かわせるのに教師が多くの時間を使い過ぎているためである。

特別の配慮を必要とする生徒の内の多くと、英語を第一外国語としない生徒の学習進度は遅く、適切な狙いに即した指導が常にされてはいなかった。他の学年に比べ、七年生（注8）における情報技術の授業は、全国カリキュラムにおいて要求される授業がされていなかった。多くの場合において援助的な場面も見られたが、一方で、いくつかの場面において進度に不必要なガイダンスが与えられたり、全国カリキュラムのレベルに即していない学習が散見された。

理事会と有能な事務職員によってサポートされた校長の効果的且つ強力なリーダーシップは大いに学校運営に寄与している。適切な将来計画は周到な財政的な運用に因っている。新任教師に対するサポートは良く為されている。理事会は、特別に配慮を必要とする子どもたちのための授業、情報技術、及び図書館の教育過程に沿った運営

に関して、適当な計画を立てていなかった。学校は支出に見合った教育を供給しているが、学校の管理運営に関してもより重点的な支出を計るべきである。日常の学校の運営は良好である。

学校全体の関係は良好である。生徒たちは主体性を発揮する機会を持つてると同時に、健全な道徳的教育を受けている。各キーステージ及びシンクスマフォームにおいて、宗教教育の時間に精神的教育を受けているにも係わらず、生徒たちはカリキュラム通りの宗教教育を受けていない。(例えば)全校集会は生徒の精神的、道徳的発達に貢献するものであるが、学校は要求されるような日々の合同礼拝を行っていない。生徒指導、及び進路指導は良く機能している。学校への保護者の援助は広範に渡っている。

*

このような指摘が続いた後、この文の中に見られた問題点を八つの項目にまとめて、学校側に改善を勧告している。

この結果の報告の約一か月後の「校長便り」に、この八つの改善勧告に対する学校側からの改善計画が具体的に提示された。紙面の関係で詳細は省くが、実効を伴った一つの大きなプロジェクトとして興味深く感じた私であった(そして、更に一年ほど後に、実際に改善されたかについての監査が行われるという)。

ところで、この報告書を読んで感じられることは、第一に、調査会が生徒の学力に関心を強く持っていることである。そして第二に、全国カリキュラムに沿った授業がなされているかを見ようとしている。日本から見ればこの二点は極、当然のことと考えられるかもしれないが、イギリスには一九八八年までは全国カリキュラムは存在しなかったのである。そして、このカリキュラムの誕生には、イギリスの子どもの学力を少しでも高めて、国力を盛り上げようという祈りが込められている。イギリスはある意味において、日本的な教育を目指し始めていると言っても良いかも知れない。日本の教育が地方分権化、個別化、多様化に向けて動き始めている事を考え

ると、両者のベクトルを私は興味深く思うが、そもそも、お互いの出発点有余りに離れているので、そう簡単には両者が交わることはないであろう。

最後に特筆すべきは、特別な配慮 (SPECIAL EDUCATIONAL NEEDS) を必要とする生徒に対する調査会の眼差しである。一四一二名の全校生徒の中にいる七名の子どもへの配慮が足りないと、調査会は強い調子で改善を勧告している。この事からも、教育の社会均等と個性の尊重を具体的な形で重要視していることが感じられた。七人の生徒の内二人は、間違いなく我が家の息子たちなのである。有り難いことだと感謝した。

次に話題を変えて、学校の講堂で行われたファッションショウの様子をお伝えしよう。これは初めにも書いたように、学校への財政的援助を目的とした一つの行事である。

約一か月前に学校からお知らせの手紙が届く。入場料は一人五ポンドで、ショウの合間にシャンパンのサービ

ス! もあるそうである。因みに、五ポンド(約八三〇円)という額は学校のこの手の行事としてはかなり高額の方である。急いで前売券を予約する。子どもたちの話によれば、学校ではモデルのオーディションもあって、生徒の間でも前人氣が高いようである。ショウの前日になると、即席モデルたちが赤や緑に髪を染めて登校し、生活指導の先生が苦笑いしていたと子どもたちは面白そうに話していた。何しろ学校の財政援助という「印籠」を彼等は持っているのである。当日、ショウは夜の七時からである。家族四人で出かける。受付にはブラックタイで決めたシックスフォームの生徒が並んでいる。メイキャップを済ませたモデルたちも、出演前だというのにロビーに出てきてしまい、ウキウキした雰囲気はまるで学芸会のそれである。男女ベアアの若い先生の司会でショウは始まる。ステージの飾りつけ、音響、照明、スモーク(舞台効果の為の煙)、もそれぞれに工夫があって、この会へ向けての熱意が感じられた。各テーマに沿って何人かずつの男女モデルが登場してくると、仲間

からの拍手は一段と高くなる。誇らしげな、そして恥ずかしげな動きが可愛い。結構、振り付けの練習もしたのだろう、仲間と振りを合わせたりして、なかなかモデルらしい動きである。肝心の衣裳は町の洋装店の協力で貸してもらったものである。その他、メイキャップも町の美容院の大きな協力を得ている。両店にとっても将来の良い顧客になる可能性大なのである。ショウ最後のテーマは「ジェームズ・ボンド」、なんと先生方の出演である。タキシードに濃いサングラス、数学の先生のボンドは最近のション・コネリーのようで決まっている！

女性の先生たちと優雅にステップを踏む。次に、校長先生が両側の女性の先生と腕を組んで登場すると拍手は一段と大きくなった。先生方もモデルを結構楽しんでるようで、それがまたその場を和やかに盛り立てている。勉強以外の事で生徒と親、そして教師が楽しい時を自然に共有している。そこには学校臭さ、教師臭さが感じられない。これは地域社会が熟していないとなかなか出来ない事であろう。当然ながら決して豪華といえるような



▲先生方のモデルはさすが堂に入っている

ショウではなかったが、シャンペンの心地良い酔いも手
伝って、私たちは暖かい気持ちで家路についた。

ところで、この行事の企画、渉外、運営、設定、練習
などを考えると、一か月以上の月日と多くの生徒、先生
のエネルギーが使われたに違いないと思われる。そし
て、なんと、このファッショショウの翌週からは年度
末の大きな試験週間が始まるのである。こんな時期にこ
んな事をしていていいのか——、等と独り言を言ってい
る私でもあった。

オット！ 日本の親臭さがまだぬけていない。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

注1 例えば、以下の本などに詳しい記述がある。『変わりゆ

くイギリスの学校』志水宏吉著、東洋監出版社・『子ど

ものための学校』稲垣忠彦編、東京大学出版会・『パブ

リックスクール』竹内洋著、講談社現代新書

注2 イギリスでは義務教育期間（五歳から十六歳）を大きく

四つのステージに分けている。キイステージ三とは十
一歳から十四歳の間のステージをさす。なお、本誌二
月号第三回連載において、イギリスの教育制度の図表
を掲載したので参考にされたい。

注3 同様に十四歳から十六歳のステージ。

注4 日本に置き換えれば高校に相当する学校で、期間は十六
歳から十八歳までの二年間である。

注5 Advanced Level の略で高校の過程。A レベル試験は高
校を終了した時点で受ける国家試験。この成績で大学
への入学が決まる。

注6 Advanced Supplementary の略で、A レベルの半分の
教授、学習時間で習得出来る。

注7 General Certificate of Secondary Education の略
で、義務教育を終了した時に受ける国家試験。高校へ
の資格試験でもある。

注8 十一歳、中等教育の一年生にあたる。七年生から十一
生までが日本の中学生に相当する。